

教科書文庫
4
815
41-1933
2000030334

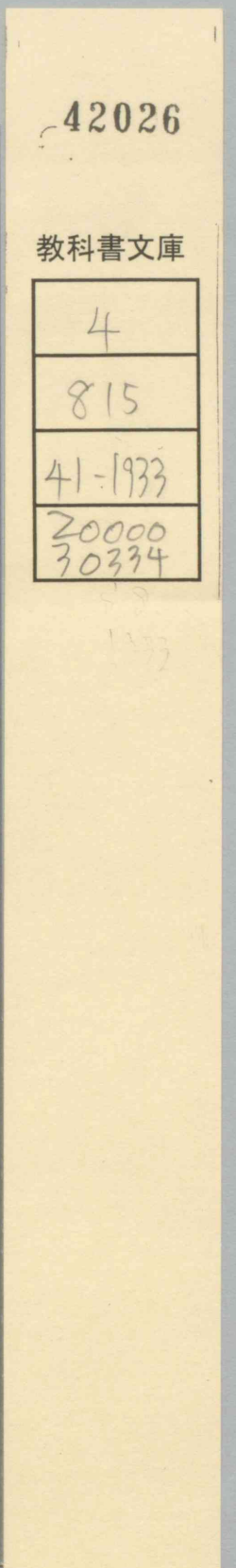
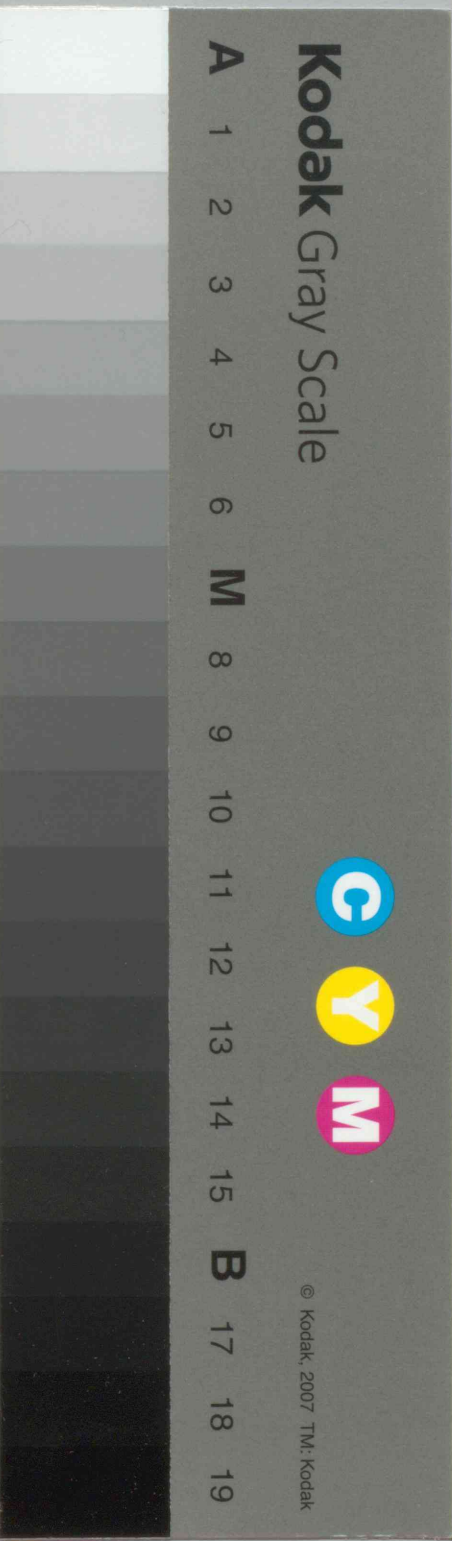
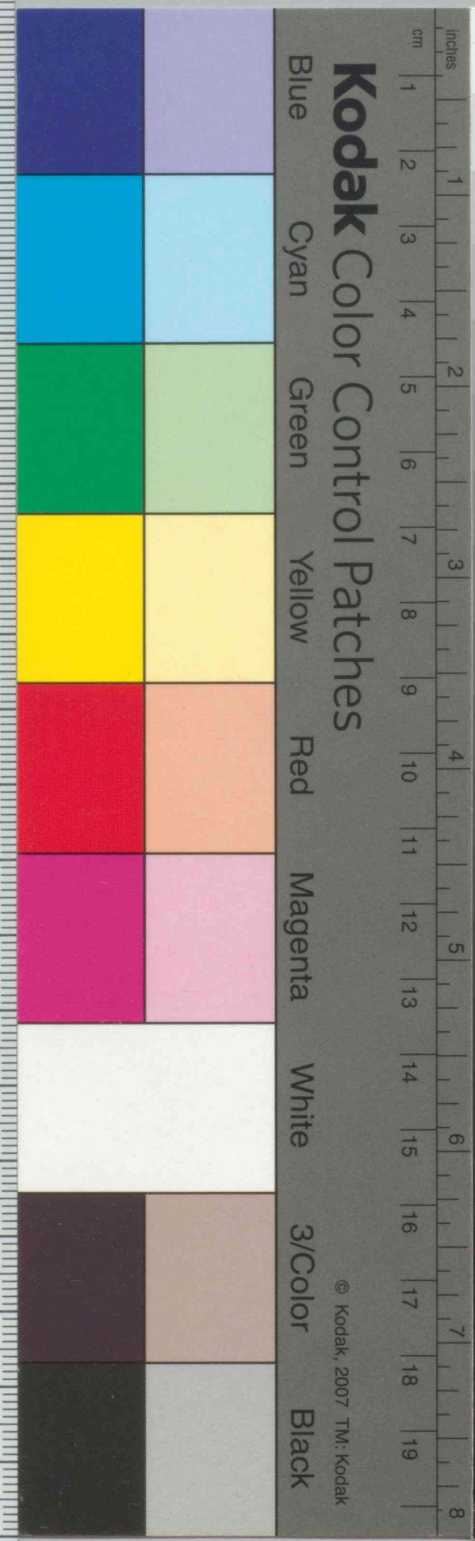
中學國文典

上級用

42026

教科書文庫

4
815
41-1933
2000030334



教科書文庫

4

815

41-1933

2000030334

資料室

375.9
Hi 18

文部省檢定

昭和八年十二月二日 中國語文

中學國文典 上級用



廣島高等師範學校
附屬中學

國語漢文研究會著

東京極書店藏版
東京·大坂

広島大学図書

2000030334



廣島大學圖書印



例言

- 一 本書は新制度による中學校上級國文法科の教科書として編纂したものである。
- 一 初年級に於ける既習事項との連絡は左の諸方法によつた。
 - 1 單語篇第一章の全部を品詞の總括的復習問題に當てた。
 - 2 各章の初めに、其の章の學習に必要な既習事項を復習問題として提出した。
 - 3 初年級に於ける既習事項の殆ど全部を簡明な表として卷末に附した。
- 一 助動詞の接續は動詞の活用による分類が記述の上からは簡便であるが、實用としては助動詞個々につき記憶するが便であり、又體言及び形容詞との接續をも併せ説く便宜から、各助

動詞につき個々に説述した。また、動詞の活用も、動詞の立本も、各一「誤り易い語法」の如きは別に章を設けて説かなかつたけれども、多くの練習問題を出して、十分に其の習熟を期した。其の教へ易く學び易く、然も十分の學力を養はんが爲に、すべて本文の説明は簡明に、練習問題は多くした。

昭和八年六月

著者識

中學國文典上級用

目次

第一篇 單語篇	一
復習	一
第一章 名詞の種類	三
第二章 代名詞の種類・稱	六
第三章 文語助動詞の接續	一〇
用言體言と助動詞との接續	一〇
一 時の助動詞	一〇
二 受身(可能崇敬)の助動詞	三
三 可能の助動詞	三

四	使役(崇敬)の助動詞	三
五	崇敬の助動詞	一四
六	推量の助動詞	一四
七	打消の助動詞	一五
八	指定の助動詞	一五
九	咏嘆の助動詞	一六
一〇	願望の助動詞	一六
一一	比況の助動詞	一六
助動詞相互の接續		一七

第四章 口語助動詞の接續

用言體言と助動詞との接續		三
一	一時の助動詞	三
二	受身(可能崇敬)の助動詞	三

三	可能の助動詞	二四
四	使役の助動詞	二四
五	崇敬の助動詞	二五
六	推量の助動詞	二五
七	打消の助動詞	二五
八	指定の助動詞	二六
九	願望の助動詞	二六
一〇	比況の助動詞	二六
助動詞相互の接續		二七

第五章 注意すべき助詞の用法

一	に・へ	三〇
二	ば	三一
三	とも	三一

四	ど・ども	三
五	な・そ	三
六	と	三
七	だにすらさへ	三
八	ばや・なむ	三
九	や・か	三
第六章	品詞の轉成	四
第二篇	文章篇	五
第一章	文の成分	五
第二章	文の成分の位置及び省略	五
一	正常の場合	五
二	倒置の場合	五
三	省略の場合	五

第三章	節	三
第四章	主部・述部・補部・敘述部	七
第五章	文の種類	七
單	文	七
複	文	七
重	文	七
附録	文法上許容ニ關スル事項	
表		
一	文語動詞活用表	
二	口語動詞活用表	



- 三 文語動詞活用識別表
- 四 動詞假名遣識別表
- 五 文語形容詞活用表
- 六 口語形容詞活用表
- 七 動詞音便表
- 八 形容詞音便表
- 九 文語助動詞活用表
- 一〇 口語助動詞活用表

中學國文典 上級用

第一篇 單語篇

復習

- 一、各品詞の名を挙げよ。
- 二次の文を各品詞に分類せよ。
 - (1) はやたそがれの影よせぬ。風おもむろに吹きかよふ、都大路の夏景色洗ひすてたる夕立の名残柳に玉とめて。
 - (2) 大阪より雨を冒して奈良に遊ぶ。汽車に乗りては風さへ加はりて窓をあくることもならねば法隆寺などいふ聲を空しく聞くの

動しわ流し物

如しやうた。... 温和... 峻烈... 親しみ易い... 自分... 夢から覺めたやうに我に返つた... しかも今見て來た富士の曉の色の清らかさ美しくしさが、幻のやうに眼から消えない。

み。

- (3) 天に一片の雲なき夕べ、逗子の海濱に立つて、伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべしとは思はれず。
- (4) 一里ほど歩くと、疲勞よりは飢の方がひどくなつた。考へると、今日舟の中で小さい握飯を二つ食べたばかり、陸へ上がつてからは水一滴飲まぬ。
- (5) 月の光は温和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出来ないが、月は眺めて親しみ易い。
- (6) いつか、夜も全く明けはなれて、月も星も光を朝日に譲つた。自分は夢から覺めたやうに我に返つた。しかも今見て來た富士の曉の色の清らかさ美しくしさが、幻のやうに眼から消えない。

中

第一章 名詞の種類

固有名詞と普通名詞

固有名詞
普通名詞

- 一 富士山は世界に於ける名山なり。
- 二 東郷大將は、明治に限らず日本に限らず、古今東西に互つての英雄だ。

右の二重傍線を施した語のやうに、地名・人名・年號等をあらはす名詞を固有名詞といふ。
固有名詞に對し、右の一重傍線を施した語のやうに、一般の名詞を普通名詞といふ。

〔太閤〕〔黃門〕等は元來普通名詞であるが、それが特に「豊臣秀吉」「徳川光圀」等を指す場合は固有名詞である。

數詞

數詞

名詞には右の外に、「五」「八リットル」「第一番のやうに事物の數量順序をあらはす數詞がある。」

練習

次の文中から名詞を選び出し、其の種類をいへ。

- (1) 三保の松原煙り渡りて、春は晝の如し。
- (2) 昔時、建武延元の内亂より應仁の兵火に至りて、天朝の舊典みな悉く亡失せり。
- (3) 林家は徳川幕府に仕へたる儒家にて、代々大學頭なりき。
- (4) 今日某の天皇の陵を尋ね歩きけり。
- (5) 渡邊競は源三位入道頼政が所従の士には第一のものなり。

- (6) 燈火を慕うて飛び来る蟲の數々、一に蛾、二にこがねむし、三に蟬、月なゝめなる時計臺、二つの針の重なりて、打つも重しや時の數、今日は木曜です。然し午後には誰も來ません。
- (9) 菊池男爵は教育勅語の講釋にイギリスへ出向かはれた。
- (10) 大正十年五月十一日、水曜晴。我が皇太子殿下は、ロンドン市役所の歡迎會に台臨になつた。閑院宮殿下を始め供奉員一同も隨伴した。
- (11) 桓武天皇の御時、都を今の京都に遷された。
- (12) 神の月日はこゝにも照る。
- (13) 源氏物語は紫式部の書いた有名な小説である。
- (14) 私はスワン萬年筆を使用することにしてゐます。
- (15) 愛國第一號飛行機が出來たのは餘程前のことです。
- (16) ラヂオの普及の早かつたのは誠に驚嘆の外ありません。

第二章 代名詞の種類・稱

人代名詞の稱

人代名詞は其の指示するものによつて、左の四つの稱に分けられる。

自稱
對稱
他稱
不定稱

自稱……自分を指す語
對稱……相手を指す語
他稱……第三者を指す語
不定稱……不定のものを指す語

僕	わたくし	わ	わ	わ	自稱
君	あなた	汝	彼	あなた	對稱
	あちら	あの方	た	誰	他稱
	どちら	どなた	な	に	不定稱

近稱・中稱
遠稱・不定稱

指示代名詞の稱

指示代名詞は其の指示する事物・場所・方向の遠近によつて、近稱・中稱・遠稱・不定稱の四つの稱に分けられる。

事物	こ	これ	そ	それ	か	か	な	に	不定稱
場所	こ	ここ	そ	そこ	あ	あ	ど	どこ	遠稱
方向	こ	こちら	そ	そちら	あ	あ	ど	どちら	不定稱
	こ	あなた	そ	あなた	あ	あ	ど	あなた	不定稱
	こ	あなた	そ	あなた	あ	あ	ど	あなた	不定稱

陛下 對稱 代名詞
閣下 他稱 代名詞
尊師 尊稱 代名詞

練習

- 次の文中から代名詞を選び出し、其の種類・稱をいへ。
- (1) 汝は誰そ。そを何處にか負ひて行く。
 - (2) 余は親しく彼等の崇嚴なる數分間の問答を聽けり。
 - (3) 諸子よ、諸子は嘗て死を考へしことありや。
 - (4) 嗚呼、別かれたる我が友、今何處にかある。
 - (5) 遙か彼方に書生とおぼしく、詩吟の聲聞ゆ。
 - (6) 我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一夜をあかさん。
 - (7) そなたには恙なくお暮しなされ候や。
 - (8) 御身いかなる人にましますかや。
 - (9) 某なほ一言あり、托げて聞きたまへ。
 - (10) われ足下を宿せる日よりさせるもてなしをなしえず。

- (11) かの殿は狩のかへるさに、工藤とやらんに討たれ給ひぬ。
- (12) おのれは如何なる者ぞ。
- (13) いづれ劣らぬ剛の者。あちらこちらと駆けめぐる。
- (14) 日本よ、お前は亞細亞の芽だ。
- (15) こいつは甚だ不都合な男だ。
- (16) あの人は自分の利益ばかりはかつてゐる。
- (17) お前は一體何をおとしてそんなにこゝを探してゐるのですか。
- (18) あなたは東京へよくゆかれますか。いや、私はあまりあちらへは行きませぬ。
- (19) そつち向かうか。さあ、どつちでもよいよ。
- (20) 小生は此の頃晝に熱中してゐます。貴兄は何をやつてをられますか。

第三章 文語助動詞の接續

復習

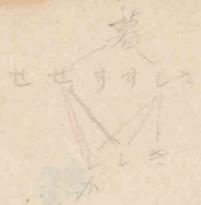
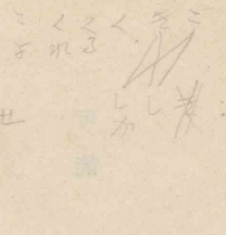
- 一、文語動詞の活用の種類を挙げ、各種類につき例語を挙げて其の活用を示せ。
- 二、文語形容詞の活用の種類、及び例語につき其の活用を示せ。
- 三、文語助動詞の種類、及び各種類に屬する語と活用とを示せ。

用言體言と助動詞との接續

一時の助動詞

- つ……………全動詞の連用形 遂に逃がれ果てつ。
 - ぬ……………ナ變以外の連用形 日は傾きぬ。
- (ナ變にはつかない)

時



たり……………全動詞の連用形

傷を受けたり。

り……………四段の已然形

書を読みり。

サ變の未然形

登山せり。

き……………全動詞の連用形

昔、高僧ありき。

但し、きがカ變・サ變につく時は、左のやうになる。

		未	然	連	用
カ變	來 ^カ	し	し	來 ^カ	し
サ變	爲 ^サ	し	か	爲 ^サ	き

終止形きはカ變にはつかない。

又、サ行四段にししかがつく時、「過ごしし時」「過ごしかば」となるべきを「過ごせし時」「過ごせしかば」となる類は差支ない。

けり……………全動詞の連用形

花散りけり。

受身(可能・崇敬)

む……………全動詞の未然形

我也行かむ。

二 受身(可能・崇敬)の助動詞

る……………四段ナ變ラ變の未然形

父に叱らる。
母に死なる。

此處に居らる。

馬に蹴らる。

らる……………右以外の未然形

よく了解せらる。

早く來らる。

「らる」がサ變につく時、「罪せらる」[「解釋せらる」となるべきを、「罪さる」
[「解釋さる」となる類は差支ない。

可能

三 可能の助動詞

べし……………ラ變の連體形

かゝる事もあるべし。

右以外の終止形

女も登るべし。

べかり……………同前

汝は行くべからず。

我也參加すべかりしに。

使役(崇敬)

四 使役(崇敬)の助動詞

す……………四段ナ變ラ變の未然形

舟を漕がす。

彼を死なす。

父宮に侍らせらる。

弓を射さす。

さす……………右以外の未然形

木を植ゑさせ給ふ。

「さす」がサ變につく時、「手習せさす」[「賣買せさす」となるべきを、「手習
さす」[「賣買さす」となる類は差支ない。

しむ……………全動詞の未然形

競争せしむ。

崇敬
推量

けり(合言)
つゆ(元)
つゆ(元)
つゆ(元)
つゆ(元)
つゆ(元)
つゆ(元)
つゆ(元)
つゆ(元)
つゆ(元)

「得しむ」といふべきを「得せしむ」といふことは差支ない。

五 崇敬の助動詞 受身使役の條参照

六 推量の助動詞

らむ……ラ變の連體形

右以外の終止形

何れの處にてあるらむ。

物思ふらむ。

家有るらし。

紅葉散るらし。

かゝる事もあるべし。

やがて發表すべし。

かくこそ侍るめれ。

雨降るめり。

いづち行きけむ。

らし……同前

べし……同前

めり……同前

けむ……全動詞の連用形

まし……全動詞の未然形

春の心は長閑けからまし。

七 打消の助動詞

ず……全動詞の未然形

未だ消えず。

ざり……同前

全く知らざりき。

じ……同前

未だ散らじ。

まじ……ラ變の連體形

かゝる事は有るまじ。

右以外の終止形

遽かには來まじ。

八 指定の助動詞

なり……全動詞の連體形

月出づるなり。

形容詞の連體形

水淺きなり。

體言

孔子は聖人なり。

たり……體言にだけつく

不世出の英傑たり。

去の聲(し)なり
する(なり)
せよ

打消

指定

咏嘆

九 咏嘆の助動詞

なり……ラ變の連體形

かくこそ今は侍るなれ

右以外の終止形

蟲の聲すなり

けり……全動詞の連用形

道はありけり

一〇 願望の助動詞

たし……全動詞の連用形

運動會を見たし

まほし……全動詞の未然形

早く知らまほし

一一 比況の助動詞

如し……全動詞の連體形

水の流るゝ(が)如し

形容詞の連體形

やゝ重きが如し

體言

落花雪の如し

如しは活用語につく時は、多く助動詞がを挟み體言につく時は必ず

比況

願望

動詞型

助動詞相互の接續

助動詞相互の接續は、大體動詞と助動詞との接續に準じて知ることが出来る。即ち、動詞の未然形につく助動詞は動詞に似た活用の助動詞の未然形につく、その他、連用形終止形連體形等につく場合も同様である。

宮は既に落ち させ られ たり けり。
師を擇びて、學ば いめ らる べし。

べし・べかりらむらしめりまじなり(咏嘆等のやうに、動詞のラ變に限り連體形につき、その他には終止形につくものは、ラ變に似た活用の助動詞にはやはり連體形につき、その他の助動詞には

のを挟む。

獨特型

終止形につく。

明日は晴天 なるべし。

かゝる事もありぬべし。

大いに努力せざるべからず。

子供には飲ましむべからず。

なり如しのやうに形容詞の連體形につく助動詞は形容詞に似た活用の助動詞の連體形につく。

かゝる行ひはすまじきなり。

祖先を尊敬すべきは、親を尊敬すべきが如し。

形容詞型

練習

一、助動詞を動詞の未然形・連用形・終止形・連體形・已然形につく

ものに分類して表をつくれ。

二、次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び接続について述べよ。

(1) 勝海舟若き頃西洋式の兵術を學びしが、常に良書の得難きを歎せり。

(2) 當時書生の身分なれば、五十兩の金は直ちに得らるべくもあらず。

(3) 枯れたる木に花を咲かせたる例もあり。

(4) 學淺くとも其の注意だに深くば、旅はなか／＼興多くして、しかも少なからぬ利益を得んこと疑あるべからず。

(5) いかなる人なりけん、たづね聞かまほし。

(6) 生きて一郷の爲に盡くせる人は死して一郷の爲に惜しまる。

(7) 餘りに遅かりしかば、人をしてうかゞはしむ。

山あり
南あり

- (8) 昇平の今の世まで、洗ひ清めんとするものの少なきこそ安からぬ。
- (9) 行き交ふ村人の取りつくろはぬざれごと、手に取る如く聞かす。
- (10) 我が夢はいづくの山にやあらん、驅けめぐりつ。
- (11) 秋風に初雁が音ぞ聞ゆなる。
- (12) あはれ今年の秋も往ぬめり。
- (13) 此の人なからましかば、如何になりなましとこそ覺えしか。
- (14) 大空にそびえて見ゆるたかねにも、のぼればのぼる道はありけり。

三、次の文の誤を正し、其の理由をいへ。

- (1) 此の品物に手を觸るゝべからず。
- (2) 枯れたる木に花を咲かしたりといふ話あり。
- (3) かゝる行ひは學生のせまじきことなり。

- (4) 彼方の山の朧ろなるは、霞の之を隔つなり。
- (5) 急を聞き走り家に歸れるに、早やことされり。
- (6) 奮闘しし甲斐ありて見事成功したりき。
- (7) 汽車に注意するべし。
- (8) 遠き路をも厭はずしてかゝる田舎に來き。
- (9) 雷にうたれて死にぬ。
- (10) 言々句々肺肝より出で、溢る如き熱誠にみちたり。
- (11) 生徒に金を持たさす事を禁じたり。
- (12) 濱の眞砂は盡きまじ。
- (13) 斥候をして敵状を見せしむ。(許容事項)
- (14) やがて油も盡くるらし。

第四章 口語助動詞の接續

復習

一、口語動詞の活用の種類を挙げ、各種類につき例語を舉げて其の活用を示せ。

二、口語形容詞の活用の種類、及び例語につき其の活用を示せ。

三、口語助動詞の各種類に屬する語を舉げて其の活用を示せ。

用言體言と助動詞との接續

一 時の助動詞

た………全動詞の連用形

日が暮れた。

だ………四段の連用形に、びみが音便になる時

漕いだ。(漕ぎた)

死んだ。(死にた)

時

受身可能崇敬

二 受身可能崇敬の助動詞

う………四段の未然形

叫んだ。(叫びた)

讀んだ。(讀みた)

よう………右以外の未然形

やがて雪が降らう。

やがて日が暮れよう。

サ變に添ふ時は「せよう」といはないで「しよう」といふ。

れる………四段の未然形

私は叱られた。

私にも讀まれる。

父上が行かれる。

兄は譽められた。

子供にでも攀ぢられる。

父上はもう寝られた。

られる………右以外の未然形

可能動詞

れるが四段に添うて「讀まれる」「書かれる」などといふべきを約して「讀める」「書ける」などといふやうに使はれることが多い。此の場合には之を一語と見て可能動詞といふことがある。

られるがサ變に添うて「缺席せられる」「全うせられる」などといふべきを約して「缺席される」「全うされる」などといふ事があるが、これ等は一語と見ず、元の形に返して動詞と助動詞とに分解するがよい。

可能

三 可能の助動詞 前條参照

使役

四 使役の助動詞

せる……四段の未然形

よく銃を磨かせる。

させる……右以外の未然形

何度も試みさせる。

させるがサ變に添うて「掃除せさせる」「全うせさせる」などといふべきを約して「掃除させる」「全うさせる」などといふ事があるが、これも元の形に返して動詞と助動詞とに分解するがよい。

崇敬

五 崇敬の助動詞

ます……全動詞の連用形

澤山有ります。

れるられるは受身の條参照。

推量

六 推量の助動詞

らしい……全動詞の終止形

やがて潮が干るらしい。

形容詞の終止形

餘程苦しいらしい。

體言

あれは僕の弟らしい。

打消

七 打消の助動詞

ぬ……全動詞の未然形(但し有るには添はない)

そんなに早くは出来ぬ。

ない……同前

友人がなかく來ない。

まい……四段の終止形

もう泣くまい。

指定

八 指定の助動詞

サ變に添ふ時には「せぬ」「しない」「しまい」となる。

右以外の未然形

まだ實が落ちまい。

だ………全動詞の連體形(但し助詞のを伴なつてのだとなる)

夜が明けるのだ。

形容詞の連體形

随分高いのだ。

體言

彼は秀才だ。

もう死ぬのです。

随分高いのです。

彼は秀才です。

です………同前

願望

九 願望の助動詞

たい………全動詞の連用形

あくまで強く生きたい。

比況

一〇 比況の助動詞

やうだ(やうです)やうである………

全動詞の連體形

遠雷が轟くやうだ。

形容詞の連體形

外は暗いやうだ。

體言(助詞のを挟む)

大砲の音が遠雷のやうだ。

助動詞相互の接續

口語助動詞相互の接續も文語の場合と同じやうに、用言との接續に準じて知ることが出来る。

人を擇んで行かせられたい。

多分母が出したのせう。

彼は知らないらしいのだ。

練習

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類・接続を説明せよ。

- (1) 隨處に吾等を満足させるもののあるのが武蔵野の特色だらう。
- (2) 何かの必要で路を尋ねたいと思つたら、畑に居る農夫に聞き給へ。
- (3) 前にも後ろにも人影が見えず、誰にも遇はない。
- (4) まさか行き暮れて困ることもあるまい。
- (5) 日は富士の背に落ちようとしてゐる。
- (6) 強い風が、ごう／＼と高い空を翔つてゐるらしい。
- (7) 人の来るらしい様子もない。
- (8) しばらくお待ちを願ひます。そのうちに歸つて來るでせう。
- (9) 法事の馳走に人を呼んだり、呼ばれたりすることが、年中の最も大きな歡樂の一つとされてゐる。

助動詞
動詞
ある
おる
ある

175
てたり

次の文中の誤を正し、其の理由をいへ。

- (1) そんなことは恐らく言うまい。
- (2) 君も行きたまへ。僕も行こう。
- (3) とてもだめだらうが、もう一度やつてみやう。
- (4) そんな亂暴なことはするまいと思ふがどうだらう。
- (5) 光陰は矢のようだ。

- (10) 雨が降りさうですから行くのをやめませう。
- (11) 珍しい本を見せて下さいました。
- (12) ちとお遊びにいらつしやいませ。
- (13) 行かうと思へば何時でも行かれる。
- (14) 先生がさういはれました。

第五章 注意すべき助詞の用法

復習

- 一、助詞を思ひ出すだけいつて見よ。
- 二、係結の法則を説明せよ。

に・へ

一 二

東京に行く(文) 東京に行く(口)

東京へ行く(口)

彼方へ行く(文) あちらへ行く(口)

あちらに行く(口)

右の例のやうに、文語ではには場所をへは方向を示す場合に使

偏りの助詞
 連体形
 已然形
 仮定形

ば

はれるが、口語では混同して使はれる。

二 ば (順接条件)

(イ) 假定の意をあらはす場合 活用語の未然形に添ふ。

明日雨降らば遠足は中止すべし。

水清くば大魚棲まじ。

父上も賛成ならば、汝も行くべし。

(ロ) 既定の意をあらはす場合 活用語の已然形に添ふ。

今日雨降れば、遠足は中止す。

水清ければ、大魚棲まず。

父上も賛成なれば、汝も行くべし。

口語では、已然形にばを添へて假定の意をあらはし、既定の意をあらはすには、終止形にのだから等を添へる。

条件
 順接 假定 ば
 逆接 既定 ども、に
 既定 ども、に

降る 降り 降り
 降り 降り 降り
 降り 降り 降り
 降り 降り 降り
 降り 降り 降り
 降り 降り 降り

とも

明日雨が降れば遠足は中止しよう。
今日は雨が降るから遠足は中止する。

三 とも(逆接条件)

動詞(動詞に似た活用)の助動詞の終止形、形容詞、形容詞に似た活用の助動詞の未然形に添うて假定の意をあらはす。

人笑ふとも意に介せじ。

如何に非難せらるとも頓着せじ。

悲しくとも泣くな。

行きたくとも辛棒せよ。

但し、連體形に添ふ習慣あるものは、それに従つても差支ない。(許容事項十二)

數百年を経るとも……

如何に批評せらるるとも……

どども

口語では、てもどもを使ひ、活用語の連用形に添ふ。

今更泣い(泣きの音便)ても、駄目だ。

悲しく(う)ても、泣くな。

いくら留められてもやめない。

薬を飲ん(飲み)の音便)ても癒らぬ。

四 どども(逆接条件)

活用語の已然形に添うて、既定の意をあらはす。

人笑へども(ど)意に介せず。

悲しけれども(ど)泣かず。

數回讀みたれども(ど)理解せられず。

假定又は既定の意をあらはす場合、誤解を生じない限り、ともども

の代はりにもを使つても差支ない。(許容事項十五)

何等の事由あるもありとも、議場に入こることを許さず。
期限は今日に迫りたるもたれども、準備は未だ成らず。

口語ではけれどももを使ひ、終止形に添ふ。

人が笑ふけれどもも、意に介しない。

悲しいけれどもも、泣かない。

數回讀んだけれどもも、理解せられない。

な・そ

五 な・そ

なは上につき、そが、カ變サ變の動詞の未然形、その他の動詞助動詞の連用形に添うて、禁止の意をあらはす。

な來こそ。

な爲なそ。

な死しにそ。

な行いかせそ。

と

六 と

(イ) 並列の意をあらはす場合、體言に添ふ外、活用語には、そ

の連體形に添ふ。

これ徳あると徳なきとによるなり。

並列のとは上の語句の一々に皆添へるべきであるが、紛れぬ場合に限り、最終のとを省いても差支ない。(許容事項十三)

宗教と道德の關係を論ず。

省いてならぬ場合

甲と乙の兄が來た
甲と乙との兄が來た。
甲と乙の兄とが來た。

(ロ) 上文を指示する場合、活用語の終止形に添ふ。

朝日昇ると思ふ間もなく、……
運命も盡きぬと見えたり。

但し、連體形に添ふ習慣あるものは、それに従つても差支ない。(許容事項十三)

だにすらすへ

七 だにすらすへ

月出づると見えて、……
嘲弄せらるゝと思ひて、……

禽獸にだに若かず。

生死すらす明らかならず。

道險しく、雨さへ降る。

右の例のやうに、だにすらすは、最も意味の軽いものを表面にあらはして、意味の重いものを言外に含ませ、さへは既にある上に更に加はる意をあらはす。

口語では右の區別はなく、さへが一般に使はれる。

禽獸にさへ及ばない。

生死さへ明らかなでない。

ばやなむ

八 ばやなむ

共に動詞助動詞の未然形に添ひ、願望の意をあらはす。

我も行かばや。

花も咲かなむ。

母に知らせばや。

ばやは自分の希望をあらはし、なむは他に對する注文をあらはす。即ち右の例で、「行かばや」は「行きたいものだ」といふ意、「咲かなむ」は「咲いてほしいものだ」といふ意となる。

又「花も咲きなむ」のやうに連用形に添ふなむは、完了の助動詞ぬの未然形に未來の助動詞むの添うたもので、助詞のなむとは違ふ。

や・か

九 や・か

(イ) 疑の意をあらはす場合 活用語に添ふ時、やは終止形に、

かは連體形に添ふべきである。

果してその人なりや。

果してその人なるか。

但し、今はやも連體形に添ふことが多い。

父に似たるや、母に似たるや。

(ロ) 上に疑問の語の來る場合 下にかを使ふべきである。

五と三との和は幾何なるか。

これを如何にすべきか。

但し、今はかやうな場合にもやを使つても差支ない。

幾何なるや。

如何にすべきや。

(ハ) 反語の意をあらはす場合

豈我のみならんや。

誰かは感激せざらん。

練習

次の文中から助詞を選び出し、傍線ある助詞の意味をいへ

- (1) 一人も残さず討ち取つて、此の度の賞に預からばや。
- (2) 僅かの勢を以て此處に止まること、豈深き謀計なからんや。
- (3) 殿かくれたまひなば、後に残りて軍するものや、候ふべき。
- (4) 之を模倣するものあらば、直ちに邪路に陥らん。
- (5) 波風やまねば、舟出ださず。
- (6) 雨は降りたるも、風は吹かざりき。
- (7) 時鳥は春に啼かざれども、雲雀は春のみならず、夏にも啼く。

- (8) 飛びて行かれん術もがな。
- (9) 東風吹かば香おこせよ梅の花主なしとて春なわすれそ。
- (10) 底ひなき淵やは騒ぐ。
- (11) 限りある世に限りなきことを思ふべきかは。
- (12) その人かたちより心なんまさりたる。
- (13) 山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心われあらめやも。
- (14) はや御馬にて彼處におはしまさん。
- (15) 雨降るに傘もさゝで出でたり。
- (16) 彼だにあらば救はれしを口惜しきことなりき。
- (17) 路いと悪しきに日さへ暮れぬ。
- (18) 禽獸すら恩を知る。況んや人に於てをや。

轉成の名詞

轉成の名詞

品詞は或品詞が他の品詞に轉じて使はれることがある。

第六章 品詞の轉成

一、動詞から轉じたもの

- (イ) 連用形から 光 戦 氷 霞 帶 眺め 笑ひ
- (ロ) 終止形から 陽炎 角力 零

二、形容詞から轉じたもの

- (イ) 連用形から 近くの家 遠くの村 早くより 遅くまで
- (ロ) 終止形から あかし(燈火) 芥子 すし(鮓)

轉成の代名詞

三、感動詞から轉じたもの
あはれ

四、形容詞の語幹に接尾語「さみ」の添うたもの
深さ 重み 寒さ ゆかしさ なつかしみ

轉成の代名詞

名詞から轉じたもの
君 僕 わらは 殿下 閣下 お前

（一）二人稱の時代名詞
三人稱の時代名詞

轉成の動詞

轉成の動詞

一、名詞から轉じたもの
（うけり股はまじ）
れうる（料理） ひとりごつ（獨言）

二、名詞を語幹とするもの
つなぐ（綱） またぐ（股） 影る

三、形容詞を語幹とするもの
惜しむ 悲しむ 樂しむ

轉成の形容詞

轉成の形容詞

動詞の未然形を語幹とするもの
騒がし 勇まし 誇らし 狂はし やまし（疾）

轉成の助動詞

轉成の助動詞

動詞から轉じたもの
たまふ おはします まします 奉る 候（文）
なさる 遊ばす（口）

轉成の副詞

轉成の副詞

一、名詞から轉じたもの
つゆ知らず ゆめ覺えず 時々參ります

二、動詞から轉じたもの
あまり早い たとへ死んでも はじめ困つた
重ね々 恐れ入ります

三、形容詞の語幹から轉じたもの

長々御邪魔致しました。うす／＼知つてゐます。
久々でお目にかゝりました。

副詞には右の外、強ひて残らず、間もなく等他の品詞から合成されたものが多い。

又形容詞の連用形はすべて副詞の働きをする。

水清く流る。空青く澄む。

轉成の接續詞

轉成の接續詞

一、名詞から轉じたもの

無事勉強致し居り候間、先方に交渉致し候處

二、動詞から轉じたもの

文法及び作文

三、副詞から轉じたもの

山また山 雲か山かはた越か、

轉成の感動詞

轉成の感動詞

一、代名詞から轉じたもの

これ、そんな事をしてはいかん。それ、又失敗した。

あれ、雪が降る。どれ行かうか。

二、副詞から轉じたもの

いかに、與一、あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし。

さて、困つた。いやはや、恐れ入りました。

練習

次の文中の轉成の語を選び出し、それを説明せよ。

(1) 始ありて終あるは少なし。

(2) 拙者はあとより參るべく候。

- (3) 喜動名と悲動名しみと交動、至動る。
- (4) 君名の惠動は山名より高動く、父名母名の恩動は海名より深動し。
- (5) 兄名より教動を受け、よく其代の教動を守動れり。
- (6) 世名の中名いと騒動がしく、心名の落動着動きをうるもの少動なし。
- (7) 陽名炎名もゆる春名の野名に、多動くの子名供名の集動ひを見る。
- (8) ゆめ動忘れ給動ふこと勿動れ。
- (9) 山名又動山名、重動なる岩名根名踏動みしめて進動みぬ。
- (10) 月名の光名が軒名端名を洩動れて、疊名の上名を明動るく照動らしてゐる。
- (11) 始動め小動さかつたが、だんく集動まつて大動きな動かたまりになつた。
- (12) 造化名の巧動みを盡動くしたものである。
- (13) 月名夜の静動けさに醉動ひ心名地名になる。
- (14) 朝名早くより夜名遅動くまで働動きな動さる

- (15) さ動てく、目名あきは不動自由動だ。
- (16) 向動かふの山名が霞名に包動まれて朧動ろに見動える。

○ 次の文中傍線ある語の異同をのべよ。

- (1) 何名事名もなかりしか。
- (2) かくこそ出動で入り給動ひしか。
- (3) 召動されしかば参動りぬ。
- (4) 波名いと静動かなり。
- (5) これは我名が書動なり。
- (6) 雲名雀名の聲名聞動ゆなり。
- (7) 死動にし子名顔名よかりき。
- (8) 露名と消動えにし命名かな。

- (ハ) 身を粉にしても報すべし。
- (イ) 稻葉の上はよきて吹かなむ。
- (ロ) 尾上の花もやがて咲きなむ。
- (ハ) 雪なむ降る。
- (イ) 月に雲なたなびきそ。
- (ロ) 冬來りなば如何せまし。
- (ハ) 水を賜へな。
- (イ) 威風堂々たり。
- (ロ) 花散りたり。
- (ハ) 彼は大統領たり。
- (イ) あなうれしのことや。
- (ロ) かしこに遊べることありや。

- (ハ) 古池や蛙飛び込む水の音。
- (イ) さることあらん。
- (ロ) 雪も消ゆらん。
- (ハ) 玉の光は添はざらん。
- (イ) さみしき冬よ行きねかし。
- (ロ) 早く往ね。
- (ハ) 姿こそ見えね聲はまがふことなし。
- (イ) 紅葉すればや照りまさるらん。
- (ロ) 人に見せばや。
- (イ) 昔紀貫之といふ歌人ありけり。
- (ロ) そよぐは鹿の渡るなりけり。
- (ハ) 吉野の山の櫻咲けり。

(12)

(イ)

我人に笑はる。

(ロ)

(ハ)

笑へる顔の愛らしさ。

(ハ)

(ニ)

亡き母のことのみ思はる。

(ニ)

(イ)

父は畫を好まる。

(イ)

(ロ)

天氣好くば行かん。

(ロ)

(ハ)

天氣好ければ行かん。

(ハ)

(イ)

これをば取らん、これをば捨てん。

(イ)

(ロ)

東京より大阪まで。

(ロ)

(ハ)

義は泰山より重し。

(ハ)

(イ)

酒は米より製す。

第二篇 文章篇

第一章 文の成分

主語述語

一 犬 走る。

二 山 高し。

三 正成は 忠臣なり。

四 彼も 行きたり。

右の文に於て、犬、山、正成は、彼もは其の文の主體をなす語であるから、これを主語といひ、走る、高し、忠臣なり、行きたりは主語についてその動作状態性質等を敘述する語であるから、これを述語といふ。

主語
述語

主語は普通體言から成り、單獨にあらはれる場合と助詞は「も」が等を伴なふ場合とある。但し、時としては、左例のやうに體言に準ずる語から成ることもある。

- 一 過ぎたるは、及ばざるが如し。
- 二 速かなるのみが、貴きにあらず。

述語は普通用言又は用言に助動詞助詞の添うたものから成る。但し、時としては、左例のやうに體言又は體言に準ずる語に助動詞の添うたものから成ることもある。

- 一 東京は 日本の首府なり。
- 二 歲月 流るゝが如し。

主語述語は文の主成分であつて、普通これが備はらねば完全な

補語

文とはいへない。

補語

- 一 猫 鼠を 捕らふ。
- 二 父 東京に 行かる。
- 三 頼朝 幕府を 鎌倉に 開く。
- 四 明治天皇 江戸城を 皇居と 定め給ふ。

右の例に於て、傍線を施した語は、各其の述語の目的をあらはし、又は述語の意味を助けて其の働きを完全にする。かやうな語を補語といふ。補語は體言又は體言に準ずる語から成り、必ず助詞を「に」と等を伴なふ。

補語は述語の性質によつて必ず無ければならぬ場合と無くて

修飾語

よい場合とある。

修飾語

一美くしき鳥、ほがらかに啼く。

二秀吉、壯大なる居城を、交通便利なる大阪に、築く。

三山のやうな波が、切立つた岩壁に、勇ましく砕ける。

右の例に於て、傍線を施した語は、各主語述語又は補語を修飾してゐる語である。かやうな語を修飾語といふ。

形容詞的修飾語
副詞的修飾語

修飾語中、體言を修飾するものを形容詞的修飾語といひ、用言を修飾するものを副詞的修飾語といふ。

形容詞的修飾語は形容詞又は形容詞に準ずるものから成る。

激しき雷、終日鳴りはたゞきぬ。

峨々たる山、遠く聳ゆ。

修飾語

庭の櫻が咲いた。

走つてゐた子供が、ぼつたり倒れた。

ジュネーブからの放送が、はつきり聞えた。

副詞的修飾語は副詞又は副詞に準ずるものから成る。

一羽の鳶、悠然と飛ぶ。

二彼は行くとして、可ならざるない。

三青く澄んだ水が、湛へてゐる。

四こそ、話してゐるのは誰ですか。

主語補語の修飾語は直接其の上につくが、述語の修飾語は他語を隔てて修飾する場合がある。

一彼は、深更まで、文を書き續く。

二突然、濃霧が一行を包んだ。

修飾語

三 全く 私は残念に思ひます。
右のやうな場合は、修飾語は其の下全部を修飾してゐるものと見てよい。

獨立語

獨立語

一 太郎や、お前もお出で。
二 あはや、子供等は諸共に河に落ち入らんとす。
三 雨ははげしく、且つ 空はくらし。
右の例に於て、傍線を施した語は、主語、述語、補語又は修飾語の何れにも屬せぬものである。かやうな語を獨立語といふ。

練習

次の文の主語、述語、補語、修飾語、獨立語を示し、修飾語は其の種

類と其の修飾する語とをいへ。

- (1) 微雨はらくくと降りいでぬ。
- (2) 熾りなる火は、濡れたる物を忽ちに乾かす。
- (3) 國旗は實に國家を代表する標識なり。
- (4) 優美温雅なる山川は、常に臉上に愛を湛ふるが如し。
- (5) 高く低く群れ飛ぶ鷗、落花の風に翻るに似たり。
- (6) おや、北斗七星が半分杉林にかくれた。
- (7) 生徒は蜘蛛の子を散らしたやうに散つた。
- (8) 日本、日本、お前は希望にかゞやいてゐる。
- (9) たまに散る落葉の音が、がさりくと聞える。
- (10) 菊のまはりの垣竹の上に、赤蜻蛉が一つ悠然と休んでゐる。

第二章 文の成分の位置及び省略

正常

一 正常の場合

一 美しき花 はらくと散る。

二 偉大なる飛行船は 廣漠たる大空を 悠々と飛ぶ。

右の例で明らかなるやうに、文の成分の正常な位置は次の通りである。

一 (修飾語)主語……(修飾語)述語。

二 (修飾語)主語……(修飾語)補語……(修飾語)述語。

但し、述語の修飾語は時に補語又は主語の上に来ること、前章で説いた通りである。

倒置

二 倒置の場合

省略

三 省略の場合

(イ) 主語の省略

一 (人々) 此の處に塵芥棄つべからず。

二 (私は) 明日お訪ねします。

(ロ) 述語の省略

一 千里の道も一歩より。(始まる)

二 あなたは、どちらへ。(いらつしやいますか)

(ハ) 補語の省略

一 神よ、願はくは(我を)助け給へ。

二 皆が其の本を買ひましたから、私もその本を買ひました。

(ニ) 其の他一部分の省略

一 樂は苦の種(なり)、苦は樂の種(なり)。

二 彼は酒(を)も煙草(を)も飲まない。

三 私はそんな事(を)は知りません。

右の例のやうに文は冗長を避け、又は意味を強める爲に其の成分を省略することがある。

練習

次の文中省略されたものは補ひ、倒置されたものは正しい位置におけ。

- (1) よき日は明けぬ、さわやかに。
- (2) 我は、はげまん、今日の業。
- (3) 鶯の宿はと問はばいかゞこたへん。
- (4) 料らざりき今日反つて君の葬を送らんとは。
- (5) 早くも、城頭高く旭日の御旗は翻りぬ。
- (6) 目をあけて、そこにどんな世界をお前は見たか。
- (7) 貴賤の別なく、子を思ふ親の心は人も我も同じこと。
- (8) ゆふべ不思議な夢を見ました。
- (9) よい工夫はないかね。あつたら教へてくれたまへ。
- (10) 三人は「どうかもう一曲」としきりに頼んだ。

第三章 節

一 外患なきは 國家の不幸たることあり。

二 神戸港は 海深し。

三 花笑ひ、鳥歌ふ。

四 人生は短く、藝術は永遠だ。

右の例のやうに、或文が全文の中に含まれてゐる場合、其の含まれてゐる文を節といふ。

右の一・二の例のやうに、節が他の文に従屬して其の成分をなす場合、これを從屬節といふ。

又右の三・四の例のやうに、節が各從屬關係をなすことなく、幾つかの節が對立的に相寄つて一文をなす時、それ等の節を對立節

節

從屬節

對立節

といふ。

從屬節には左の四種がある。

體言節

一 價の高きが 貴きにあらず。

二 我々は 幾十隻の軍艦が列んでゐるのを 見た。

右の例のやうに、體言に準じて文の主語・補語の働きをする節を

體言節といふ。

用言節

一 蟻は 性勤勉なり。

二 麒麟は 首が長い。

右の例のやうに、用言に準じて文の述語の働きをする節を用言節といふ。

體言節

用言節

形容詞節

形容詞節

一月明かき夜は 散歩に よし。
二私は 陽炎の燃える春の日は 好きです。

右の例のやうに、形容詞に準じて形容詞的修飾語となる節を形容詞節といふ。

副詞節

副詞節

一鷺は 空高く飛ぶ。

二大工達が 節面白く 歌つてゐる。

右の例のやうに、副詞に準じて副詞的修飾語となる節を副詞節といふ。

練習

次の文中から節を選び出し、其の節の種類をいへ。

- (1) 花のうるはしきは櫻なり。
- (2) 寒からぬ雪、雲なき空より降る。
- (3) 味よき魚は荒海に産す。
- (4) 水清ければ、底の眞砂も数へつべし。
- (5) 行人稀にして、立ちのぼる塵もなし。
- (6) 天高く馬肥ゆる時來れり。
- (7) 旅館の燈かすかにして、鶏鳴曉を催す。
- (8) 春は花咲き鳥歌ふ。
- (9) 秋の風は泣き、冬の風は怒かる。
- (10) 霜は色うるはしく木々の梢を染め出せり。
- (11) 花が咲くのは春だ。

- (12) 今日雪が降らうとは思はなかつた。
- (13) 腹の裂けるほど食べた。
- (14) 私は日の出ないうちに起きる。
- (15) 支那は面積が廣く、人口が多い。
- (16) あれは疑もなくボチの啼聲だ。
- (17) 日本は世界に比類のない國である。
- (18) 兄は繪かきで、弟は音楽家である。
- (19) 我が國は風光が極めて明媚である。
- (20) 使の男が矢の飛ぶやうに飛んで来る。
- (21) 雨が降ると地が固まる。

第四章 主部・述部・補部・敘述部

主部

主部

一 雲霞の如き大軍 押し寄せたり。

二 飛行機の群れ飛ぶのは 實に壯快だ。

右の例のやうに、主語に修飾語が添ふ場合、又は主語が節から成る場合、「雲霞の如き大軍」「飛行機の群れ飛ぶのは」といふ全體を主部といふ。

述部

一 蓮の花 涼しげに咲き出づ。

二 私 祖父は なかく 元氣が宜い。

右の例のやうに、述語に修飾語が添ふ場合、又は述語が節から成

補部

る場合、涼しげに咲き出づ」なか／＼元氣が宜い」といふ全體を述部といふ。

補部

一 健全なる精神は 健全なる身體に 宿る。

二 母親が 子供の泣くのを あやしてゐる。

右の例のやうに、補語に修飾語が添ふ場合、又は補語が節から成る場合、健全なる身體に「子供の泣くのを」といふ全體を補部といふ。

敘述部

敘述部

主語又は主部に對して、補語又は補部と述語(又は述部)とを合はせて敘述部といふ。

練習

次の文の主部・述部・補部・敘述部を示せ。

- (1) 桃の花紅なり。
- (2) 荒廢せる城址は、狐狸の棲處となれり。
- (3) 野も山も美しくしき朝日の光を浴びたり。
- (4) 月光は隈なく庭の面を照らす。
- (5) 若やかに麗しき聲は水のやうに流れたり。
- (6) 華やかなりしあたりも、人住まぬ野らとなりぬ。
- (7) 彼所の森こそ神の鎮まります所なれ。
- (8) 梢をそよぎわたる風の音高し。
- (9) 月の出でたる又なくうれし。
- (10) 日本語は日本人の精神的血液なり。

- (11) 涼しい風がそよ／＼と吹いて来る。
- (12) 大小さまざまの馬が元氣よくかけまわてゐる。
- (13) 山の裾があらこちら白いのは蕎麥の花であらう。
- (14) 日本の櫻は、其の色が極めてあつさりしてゐる。
- (15) 黄金のやうな月が出て来た。
- (16) もじや／＼と毛の生えた腕がぬつと出た。
- (17) それは、春雨のしと／＼と降る寒い夜のことである。
- (18) 雪をいたゞいた富士が淡くほのかに聳えてゐる。
- (19) 身をさるやうな寒い風がりう／＼と笠を吹く。
- (20) 健全な精神は健全な身體に宿る。

單文

單文

第五章 文の種類

- 一 鳥啼く。
 - 二 巡査 賊を追ふ。
 - 三 商業は 之に従事する商人だけを利する爲のものではない。
- 右の例のやうに、主語と述語との關係が一通りであつて、二文の中に節を含む、ことのないものを單文といふ。
- 一 正成と義貞とは 建武中興の功臣なり。
 - 二 私 は 鉛筆とペンとノートとを 買った。
 - 三 少女は 且つ笑ひ且つ泣く。

複文

四 私は 行はうと思つたことを行ひ盡くし 語らうと思つたことを語り盡くした。

右の例のやうに、主語・述語・補語が幾つも重なつたり、又は補語に述語の添うたものが幾つも重なることがあるが、主語と述語との關係は同種類のものであつて、別種のものではない。これもやはり單文である。

複文

- 一 飛行機の飛び交ふは 壯快なり。
- 二 月明かき夜は 散歩に よし。
- 三 日本海は 波高し。
- 四 鮎は 瀬の早きを 喜ぶ。
- 五 歲月は 水の流るゝが如く 過ぎ去る。

條件の助詞の用ひをよめる
 日たつては又
 ば、いふと云ふとも
 古に のか

重文
 天気晴朗なれども
 波高し

文主

重文

持論の助詞の用ひをよめる
 大つては又
 下にして(は)

六 天気晴朗なれども 波高し。

右の例のやうに、從屬節を含む文を複文といふ。

右の例の三のやうに節が述部となつてゐる場合、日本海はといふ全文の主語は特に文主といふ。

太郎は 性機敏なり。

重文

- 一 月明らかに、星稀なり。
- 二 兄は庭を掃き、弟は水を汲む。
- 三 風雨烈しく、道は暗く、提灯も消えたり。

右の例のやうに、對立節の相寄つて成る文を重文といふ。

練習

次の文の種類をいひ、其の構造を説明せよ。

- (1) 蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟す。
- (2) 磯打つ波の音高く、濱邊を風の立ち騒ぐ。
- (3) 人生の最も幸福なるは知己を有てるにあり。
- (4) 月影のさぶなみにくだけ、漁火の波間に出没する夜景も亦一段の趣あり。
- (5) 東寺の塔は吾を迎へて立ち、鴨川の水は吾を待ちて歌ふ。
- (6) 家陋なりといへども膝を容るべく、庭狭ましといへども碧空を望むべし。
- (7) 風の音も、水の音も、車馬の音も、人の足音も、全く消え果てた。
- (8) 月の光は慰安の光である、慈愛の光である。
- (9) 天氣のよい日は暑いし、雨の降る日は鬱陶しい。

- (10) 銀杏が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いた様に明るい。
- (11) いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向かふの山も薄墨色にくれてゆく。
- (12) 爛漫と咲き亂れた櫻花の、山を埋め、谷に満ち、雲とまがひ、雪とまがふ景色は日本特有の美である。

中學 國文 典 上級用 終

附錄 文法上許容ニ關スル事項

一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。

二 「シク・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。

例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四 「コトナリ」異ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。

五 「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 手習サス。

周旋サス。

賣買サス。

六 「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨

ナシ。

例 罪サル。

評サル。

解釋サル。

七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各其ノ地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「幕シシ時」「過シシカバ」ナドイ

フベキ場合ヲ「幕セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九 てにをはノ「ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ連続スルモ妨ナシ。

例 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

二 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

二 七にをはノ「トモ」フ動詞使役ノ助動詞及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習

慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラル、トモ

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

三 七にをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及ビ時ノ助動詞ノ連體言ニ連

續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

三 語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終

ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解を生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五 てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ附スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六 「トイフ」「トイフ語ノ代リ」「ニナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例

「イハユル哺乳獸ナルモノ。顔回ナルモノアリ。」

口語

四	段
有	死
ら	な
り	に
る	ぬ
る	ぬ
れ	ね
れ	ね
ラ	ナ
變	變

文語體用新田語體用

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
有	死	ら	な	り	に	る	ぬ	る	ぬ
れ	ね	れ	ね	ラ	ナ	變	變		

表用活詞動語口

カ 變	下 一段	上 一段	四 段	種 類
(來)	(蹴) 棄	(射) 起	有 死 書	語幹 / 語尾
こ	けて	いき	ら な か	未 然
き	けて	いき	り に き	連 用
く る	けて る	いき る	る ぬ く	終 止
く る	けて る	いき る	る ぬ く	連 體
く れ	けて れ	いき れ	れ ね け	已 然
こ い	けてて ろよろよ	いきき ろよろよ	れ ね け	命 令
カ 變	下 一段	上 一段	ラ ナ 四 變 變 段	デ文 ハ語

表用活詞動語文

ラ 變	ナ 變	サ 變	カ 變	下 一段	下 二段	上 一段	上 二段	四 段	種 類
有	死	(爲)	(來)	(蹴)	棄	(射)	起	書	語幹 / 語尾
ら	な	せ	こ	け	て	い	き	か	未 然
り	に	し	き	け	て	い	き	き	連 用
り	ぬ	す	く	け	つ	い	く	く	終 止
る	ぬ	す	く	け	つ	い	く	く	連 體
れ	ぬ	す	く	け	つ	い	く	け	已 然
れ	ね	せ	こ	け	て	い	き	け	命 令

表別識用活詞動語文

下二段	上二段	四段	ラ變	ナ變	サ變	カ變	下一段	上一段
打消のずがエ列の音につく	打消のずがイ列の音につく	打消のずがア列の音につく	有り 居り 侍り 形容動詞	死ぬ 往ぬ	す(爲) 他語にすがついたもの	く(來)	蹴る	著る ⁺ 似る 煮る 干る ⁺ 見る(顧みる・惟みる) 鑑みる・試みる) 射る 鑄る 居る ⁺ 率ゐる

表用活詞動語口

サ變	カ變	下一段	上一段	四段	種類
(爲)	(來)	(蹴) 棄	(射) 起	有 死 書	語幹 / 語尾
しせ	こ	けて	いき	ら な か	未然
し	き	けて	いき	り に き	連用
する	くる	ける	きる	る ぬ く	終止
する	くる	ける	きる	る ぬ く	連體
すれ	くれ	ける	きる	れ ね け	已然
しせ ろよ	こ い	けてて ろよろよ	いき ろよろよ	れ ね け	命令
サ變	カ變	下一段 下二段	上一段 上二段	ラ ナ 四 變 變 段	デ文 ハ語

表用活詞

ラ變	ナ變	サ變	カ變	下一段	上一段
有	死	(爲)	(來)	(蹴)	棄
ら	な	せ	こ	け	て
り	に	し	き	け	て
り	ぬ	す	く	け	る
る	ぬ	す	く	け	る
れ	ぬ	す	く	け	れ
れ	ね	せ	こ	け	よ

倭音同表

ト音同		ウ音同		エ音同		オ音同	
カ	キ	ク	ケ	コ	キ	ク	ケ
カ	キ	ク	ケ	コ	キ	ク	ケ
カ	キ	ク	ケ	コ	キ	ク	ケ
カ	キ	ク	ケ	コ	キ	ク	ケ

紙音同表

ト音同		ウ音同	
カ	キ	ク	ケ
カ	キ	ク	ケ

五

表別識遣名假詞動

ダ 行	ザ 行	ハ 行	ヤ 行	ワ 行	ア 行
右の外	混す……… サ變の語尾の濁るもの	右の外	老ゆ 悔ゆ 報ゆ……… 其他終止形がゆとなるもの………	植う 飢う 据う……… 居る 率ゐる………	得………
	下二段		下二段 上二段	上二段 下二段	下二段

詞容形語文		
シク活用	ク活用	種類
樂	高	語幹 語尾
しく	く	未然
しく	く	連用
し	し	終止
しき	き	連體
しけれ	けれ	已然
		命令

詞容形語口		
シク活用	ク活用	種類
樂	高	語幹 語尾
しく	く	未然
しく	く	連用
しい	い	終止
しい	い	連體
しけれ	けれ	已然
		命令

表便音詞動

撥音便			促音便			ウ音便		イ音便		
み	び	に	り	ひ	ち	ひ	行	ぎ	き	
怨んで	飛んで	死んで	賣つて	買つて	勝つて	問うて	行つて	泳いで	咲いて	て(で)
怨んだ	飛んだ	死んだ	賣つた	買つた	勝つた	問うた	行つた	泳いだ	咲いた	ただ
怨んだり	飛んだり	死んだり	賣つたり	買つたり	勝つたり	問うたり	行つたり	泳いだり	咲いたり	た(だ)り

表便音詞容形

ウ音便		イ音便	
しく	く	しき	き
楽しう	高う	悲しい哉	善い哉

表別識遣名假詞

ダ行	ザ行	ハ行	ヤ行
右の外	混す……… サ變の語尾の濁るもの	右の外	老ゆ 悔ゆ 報ゆ……… 其他終止形がゆとなるもの……… 下二段

詞容形語口		
表	用	活
シク活用	ク活用	種類
樂	高	語幹/語尾
		未然
〔しく〕	く(う)	連用
しい	い	終止
しい	い	連體
しけれ	けれ	已然
		命令

詞容形語文		
表	用	活
シク活用	ク活用	種類
樂	高	語幹/語尾
しく	く	未然
しく	く	連用
し	し	終止
しき	き	連體
しけれ	けれ	已然
		命令

語助動詞

		(使役 崇敬)		
ら	ら	し	さ	す
し	む	む	す	
		し	さ	せ
		め	せ	
らし		し	さ	せ
く		め	せ	
ら	ら	し	さ	す
し	む	む	す	
らし	ら	し	さ	する
き	む	む	する	る
	ら	し	さ	すれ
	め	む	すれ	れ
		し	さ	せよ
		め	せよ	よ

表 用 活 詞 動 助 語 文

推 量				(崇 使 敬 役)			可 能				(崇 受 敬 身)		時						種 類			
													未 來	過 去		完 了						
ま	け	め	べ	ら	ら	し	さ	す	べ	べ	ら	ら	ら	ら	む	け	き	り	た	ぬ	つ	語 活 用
し	む	り	し	し	む	む	す	す	か	し	る	る	る	る		り	き		り	ぬ	つ	未 然
			べ			し	さ	せ	べ	べ	ら	ら	ら						た	な	て	連 用
			く			め	せ	せ	か	く	れ	れ	れ						ら	に	て	終 止
			く	ら		し	さ	せ	べ	べ	ら	ら	ら						た	に	て	連 體
ま	け	め	べ	ら	ら	し	さ	す		べ	ら	ら	ら	む	け	き	り	た	ぬ	つ	已 然	
し	む	り	し	し	む	む	す	す		し	る	る	る	む	り	き		り	ぬ	つ	命 令	
ま	け	め	べ	ら	ら	し	さ	す		べ	ら	ら	ら					た	ぬ	つ		
し	む	る	き	し	む	む	する	する		き	る	る	る					る	る	る		
ま	け	め	べ		ら	し	さ	す		べ	ら	ら	ら	め	け	し		た	ぬ	つ		
し	む	れ	けれ		め	む	す	す		けれ	る	る	る		れ	か		れ	れ	れ		
						し	さ	せ					ら						ぬ	て		
						め	せ	よ					れ						ね	よ		

表 用 活 詞 動 助 語 文

比況	願望		咏嘆		指定		打消			推量					(崇敬)			可能			(受身)		時						種類			
																							未來	過去		完了						
																														つ	ぬ	たり
如し	まほし	たし	けり	なり	たり	なり	まじ	じ	ざり	す	まし	けむ	めり	べし	らし	らむ	しむ	さす	す	べかり	べし	らる	る	らる	る	む	けり	きり	たり	ぬ	つ	語活用
如く	まほしく	たく			たら	なら	まじく		ざら	す				べく			しめ	させ	せ	べから	べく	られ	れ	られ	れ				たら	な	て	未然
如く	まほしく	たく			たり	なり	まじく		ざり	す				べく	らしく		しめ	させ	せ	べかり	べく	られ	れ	られ	れ				たり	に	て	連用
如し	まほし	たし	けり	なり	たり	なり	まじ	じ		す	まし	けむ	めり	べし	らし	らむ	しむ	さす	す		べし	らる	る	らる	る	む	けり	きり	たり	ぬ	つ	終止
如き	まほしき	たき	ける	なる	たる	なる	まじき	じ	ざる	ぬ	まし	けむ	めり	べき	らしき	らむ	しむる	さする	する		べき	らるる	る	らるる	る	む	ける	しる	たる	ぬる	つる	連體
	まほしけれ	たけれ	けれ	なれ	たれ	なれ	まじけれ	じ	ざれ	ね	ましか	けめ	めれ	べけれ		らめ	しむれ	さすれ	すれ		べけれ	らるれ	る	らるれ	る	め	けれ	しか	たれ	ぬれ	つれ	已然
					たれ				ざれ								しめよ	させよ	せよ					られよ	れよ					ね	てよ	命令

口語助動詞活用表

願望	指定		打消			推量	崇敬	使役		(崇敬)可能		受身		時		種類	
														未來	過去		
たい	です	だ	まい	ない	ぬ	らしい	ます	させる	せる	られる	れる	られる	れる	よう	う	た	語活用
	で	だ					ませ	させ	せ	られ	れ	られ	れ			たら	未然
たく <small>(たく)</small>	で	だ		なく	す <small>(らしう)</small>	まし	させ	せ		られ	れ	られ	れ			たり	連用
たい	です	だ	まい	ない	ぬ <small>(んぬ)</small>	らしい	ます	させる	せる	られる	れる	られる	れる	よう	う	た	終止
たい				ない	ぬ <small>(んぬ)</small>	らしい	ます	させる	せる	られる	れる	られる	れる			た	連體
たけれ				なけれ	ね		ますれ	させれ	せれ	られれ	れれ	られれ	れれ				已然
							ませ	させろ	せろよ			られろ	れろよ				命令

たい、ます、た、たけ、た、た

文部省檢定濟

昭和八年十二月二日 中國語文教科

發行所
發賣所

東京市赤坂區新坂町六十八番地
大阪府西區立賣堀南通三丁目
振替口座大阪八六〇四五番
大阪府東區北久太郎町四丁目
振替口座大阪二三一一番
東京市日本橋區數寄屋町七番地

京極書店
柳原書店
林平書店

作者權所有



發行者
印刷者

京極喜太郎

著者

國語漢文研究會

廣島高等師範學校附屬中學校

大阪府西區立賣堀南通三丁目二十一番地


昭和八年六月十日印
昭和八年六月十三日發行
昭和八年十一月十五日訂正再版印刷
昭和八年十一月十八日訂正再版發行

〔中學國文典〕
(上級用)

定價金四拾三錢

定海縣志

中華民國二十二年二月

<p>定海縣志</p> <p>卷之...</p> <p>...</p>		<p>...</p> <p>...</p>
<p>...</p> <p>...</p>	<p>...</p> <p>...</p>	<p>...</p> <p>...</p>



広島大学図書

2000030334



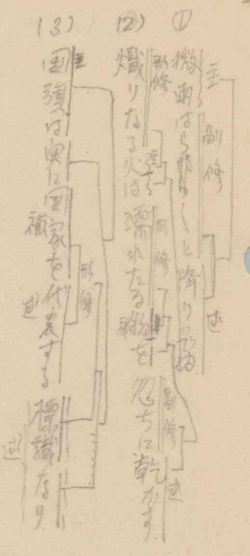
八
 けけく
 ぬぬぬ
 めむむ

- ① も、て、の、に
- ② の、を、て、に
- ③ は、に、て
- ④ を、に
- ⑤ は、に
- ⑥ は、に、は、の、み、に
- ⑦ ても、かな、(願望)
- ⑧ ば、よ、の、と、て、な、い
- ⑨ は、や、は、子、話、(詠嘆)
- ⑩ に、を、か、け

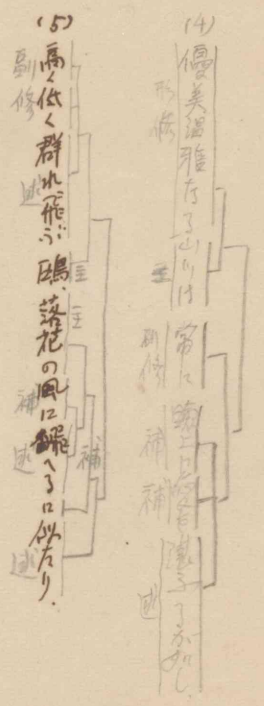
- ⑪ は、に、は、の、み、に
- ⑫ たり、なん、係り、強め
- ⑬ は、は、なん、と、ま、に、や、ま
- ⑭ に、に、に、存、人、希、望
- ⑮ にも、に、逆、接、既、定
- ⑯ は、を、逆、接、假、定

⑯ ば、を、逆、接、假、定

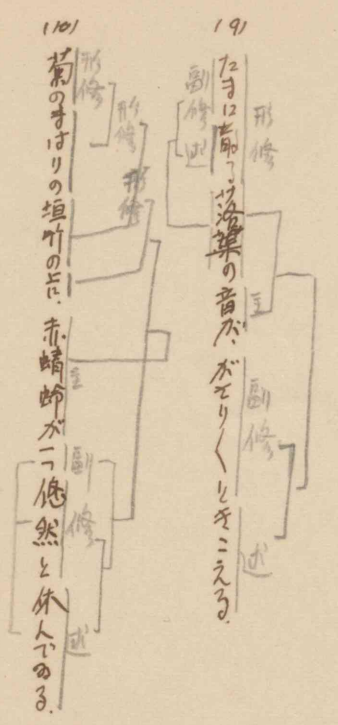
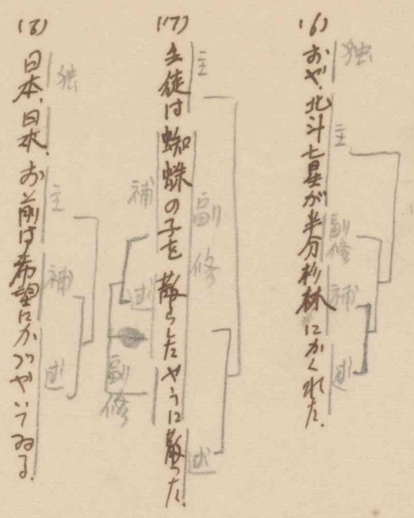
打消の助詞
 すうの短かくなつたもの



助詞 助動詞 助詞 助詞
と 上には 三つ



修飾語
いついん存にいのくら
補 何れに



B (題文)

勝負

第四學年北組四八五番 昭和十
山口勝之

人世往くところとして勝負なうざるはなし、~~勝~~ありは

負あれば勝受其の裏を行く。野球蹴球テニス等々の競技に

一方が勝つば他方には負か^かつてこれ人生の定めなうずや。

~~け~~も勝たんとすればも勝つが勝利を得んじすればも得り

れ又~~一~~政治方面に於て、經濟方面に於て、其の他教育、文學

我々の日常生活に於て、~~一~~一方^が勝~~を~~を制するや他方は必

け^をに^は存^はせ^れる。勝負を得るには忍耐が必要なり、何事もが

く行つてこそ真の勝は得らるるのである。た^は勝^を得^たい

たいとそれのみを思つて悪道^{邪道}におちいりたために勝を

どは真の勝にあらず。~~後~~いにしへの領主が民を苦しめて

自分の思ひどほりに行つたり、足利氏^{北條}が天下を取らん

天子様をもないがしるにして天下を奪^奪つたり等は勝利を

うではあるが真の勝利に非ず。然らば真の勝は^は何ぞや。

しき道をふんで忍耐強くやり^のの後に初めて自分の^行の

満足を覺えたならばそれが實際の正しい勝利である。か

正成が大した恩賞もなく位もあまりもうはな^いの心に

様に忠義をつくしたのも自分自身で其の境^偶に感激し満

^あたからではな^いか。又木村重成が茶坊主に頭をなぐられ

かつけられず忍耐を^もつてこれをこ^うへ終には^相射^をして

まうしめ家來にまでもさせたのは彼の忍耐に基^づくもの

すや。然し又負けたりとしてみてもやはり忍耐強く正しく行っ

ば必ず勝を得ることか出来勝つたといつても由断をすれ

一方が勝つれば他方には負かなく、これ人生の定めならずや。
 けも勝つるにすれば勝つず、勝利を得んとすればも得ず。
 此又十訓政治の面に於て、經濟の面に於て、其の他教育、文學、
 我々の日常生活に於て、~~一~~一方は勝つを制するや、他方は必
 け ^{右に存はせられたる} ~~勝を得ず~~ 勝を得るに、忍耐が必要なり、何事もがま
 く行つてこそ真の勝を得るるのである。たゞ勝を得たい勝
 たいとそれのみを思つて悪道、邪道におちいり、ために勝を得
 たいは真の勝にあらず。 ~~徳~~ いにしへの領主が民を苦しめて
 自分の思ひどほりに行つたり、足利氏が備後天下を取らん
 天子様をもたないがしるにして、天下を奪つたり等は勝利を得
 うではあるが真の勝利に非ず。然らば真の勝とは何ぞや。
 しき道をふんで、忍耐強くやり ^{その} の後に初めて自分の修行
 満足を覺えた存らばそれが實際の正しい勝利である。か
 正成が大した恩賞も存く位もあまりもらはないのに、心か
 様に忠義をつくしたのも、自分自身で其の境遇に感激し、満足
^あ 右からではないか。又木村重成が茶坊主に、頭をなぐられ
 かつはらさず、忍耐を [●] もつて、これをさうし、終には相手をして
 まらしめ、家來にまでもさせたのは、彼の忍耐に基くもの
 ずや。然し又負けたりして、もやけり、忍耐強く正しく行つて
 必ず勝を得ることか出来、勝つたといつても、油断をすれば
 負けたりします。故に勝と負は離れてゐるやうで、離れ存
 である。負けるが勝ち、勝つてかぶとの緒をしめと等の標
 によくこの真状を表はしてゐると思ふ。我々は正しく生き

しい真の勝利を得ようではないか。

B (題文)

勝負

第四學年北組四八五番 昭和九年十月二十五日 山口勝之

人世往くところとして勝負なるは存し、勝ありは負あり。負あれば勝受其の裏を行く。野球、蹴球、テニス等々の競技に於ても一方が勝てば他方には負かつく。これ人生の定めならずや。然れども勝をんとして勝たず、勝利を得んとしてそれをも得ずれば、此れ又政治方面に於て、經濟方面に於て、其の他教育、文學、職業等我々の日常生活に於て、一方は勝を制するや、他方は必ずや負ける。是に存はせられたる。勝負を得るに忍耐が必要なり、何事もがまん強を行つてこそ真の勝は得らるるのである。たゞ勝を得たい勝を得たいとそれのみを思つて悪道、邪道におちいり、ためしに勝を得るに、いは真の勝にあらず。慎いにしてへの領主が民を苦しめてまでも自分の思ひどほりに行つたり、足利氏が備後天下を取らんとして、天子様をもないがしるにして、天下を奪つたり等は勝利を得たりやうではあるが、真の勝利に非ず。然らば真の勝とは何ぞや、則ち正しき道をふんで、忍耐強くやりぬるの後に初めて自分の行ふべき事に満足を感じ、た存らばそれが實際の正しい勝利である。かの楠木正成が大した忠義をつとめたのも、自分自身で其の境遇に感激し、満足して、様口忠義をつとめたのも、自分自身で其の境遇に感激し、満足して、あつたからではなから。又木村重成が茶坊主に頭をなぐられたにも、あつたしめ、家來にまでさせられたのは、彼の忍耐に基くものにあらずや。然し又負けたりして、もやけり、忍耐強く正しく行つて行けば、必ず勝を得ることか出来、勝つたといつても、神断をすれば必ず

一方が勝つれば他方には負かなく、これ人生の定めならずや。然れども勝を人とすれども勝つが勝利を得んはそれをも得られず。此又十世政治方面に於て、經濟方面に於て、其の他教育、文學、職業等我々の日常生活に於て、~~一~~一方が勝を制するや、他方には必ずや負け~~る~~に存せられたる。勝を得るは、~~何事~~に、忍耐が必要なり、何事もがまん強く行つてこそ眞の勝は得らるるのである。たゞ勝を得たい勝を得たいし、それのみを思つて悪道、邪道におちいり、ためしに勝を得るなれば眞の勝にあらざる。いにしへの領主が民を苦しめてまでも自分の思ひどほりに行つたり、足利氏が~~天下~~天下を取らんとして、天子様をもたないがしろにして、天下を奪つたり等は勝利を得たりやうではあるが眞の勝利に非ず。然らば眞の勝とは何ぞや。則ち正しき道をふんで忍耐強くやりぬるの後に初めて自分の~~行~~行つた事には満足を感じえたり、それを実際の正しい勝利である。かの楠木正成が大した忠實もなく位もあまりもうはないのに、心に心から天子様は忠義をつくしたのち、自分自身で其の境候に感激し満足して、おたからずにはないか。又木村重成が茶坊主に、頭をなぐられたいもかつかはらず、忍耐を~~も~~もつてこれをこらへ、終には相射をしてあやまずや。然し又負けたいとして、もやけり、忍耐強く正しく行つて行けば必ず勝を得ることか出来、勝つたといつても、油断をすれば必ず負けつしまふ。故に勝と負は離れ、あるやうで離れたいものである。負けると負けると勝つてかぶとの鱗を締め、等の標語も実によくこの眞状を表はしてあると思ふ。我々は正しく生き、正し